

# 熔接

出石アカル

絵 菅原洸人

題字 六車明峰

喫茶店のマスターになる前に少しばかりサラリーマンをしていたことがある。

従業員十人に満たない小さな工場だったが、レーザー加工機、プラズマ加工機、タレットパンチングプレス機、ロボット熔接機など、コンピュータ制御の最新工作機を設備していて、町工場としては優れた会社だった。

そこでわたしは経理を担当したのだが、慣れるに従いCADを使つての図面作成から職人さんに交じつての現場作業など経理以外にもいろんな仕事に手を出し、全て新鮮だった。

わずか三年間の勤めだったが、現場は、ケン、キツイ、キタナイの3K工場だったので、その間にたくさんの工員が入社しては辞めて行くのを見た。

職場を転々として来た大木さんは

この重い靴を履き続けて

五十歳を越えた

「何でかしらん だんだん小っちゃいところに  
移ってきて」と

足かせのような黒い靴を見つめていた

去年暮れ

彼はまたこの会社を辞めて行つた

地震があつて

新しい職場は見つかつただろうか。

（詩集『工場風景』より「安全靴」後半）

地震後に作つたこの詩は、そのうちの一人、熔接工の大木さんのことを書いたものである。

当時、心を開いて話せる工員はなかった。社長の縁故で入った事務屋のわたしを工員たちは信用しなかった。昼食は同じ部屋でとっていたが、わたしの前では、バカ話はしても迂闊なこととは言えないと警戒していたようで、微妙な空気が流れていた。そんな中、同じ年の大木さんだけがわたしに親しく接してくれたのである。

それから十三年。わたしは今喫茶店にいる。

そこへ突然彼が顔を出して驚いた。会社を辞めてからは音信もなく、もう彼とは会うこともあるまいと思っていたのだった。

熔接焼けた大木さんの人懐こい笑顔は変わっ

ておらず、わたしも懐かしく、思わず握手を求めた。硬い手だった。

ずっと溶接の仕事をして来たという。

「それしか俺には能がないもん。金属と金属をひつつける、俺にはそれしか出来んから」

彼は簡単そうに言うが、プロの溶接は高度な技能が要求される。

彼と何度か行つたスナックで聞いた彼の歌に驚

かされたことがある。聞けば

若いころ、歌謡教室に通つた

ことがあつたのだと。作曲家

の吉田正が先生で、三田明の

顔も見たことがあると。

さらに彼は、空手の有段者

でもあつた。気は優しくて力

持ち。女性にもて当然だ。

しかしというか、だからと

いうか、この人の人生も波瀾含みである。



そして

「66か…」とつぶやいた。

(同「大木さん」全行)

その女の子が、もう高校生だという。66歳には二年早い、このほど仕事をやめて、専業主夫になつたのだと。看護師の奥さんが若いのでそれが出来るのだ。

「ところで、前の奥さんの子は？」と聞いてみた。すると、

「前には子どもはおらん」

「えっ？ そんなはずないやろ。」

たしかあのころ子どもの養育費を

…」

「いや前にはおらん、一番初

めにはおつたけど…えーつと

…」と彼は指折り数える。

「おいおい、どこまで指折るねん」とわたし。

今の奥さんは五人目だという。それは聞いてな

かつた。

五人の女性全てと婚姻届は出したのだという。

「ちゃんと結婚して、ちゃんと離婚した。その

時はみな本気やつたからなあ。初めの子が、今の

嫁と同じ年や。ほんで嫁の母親が俺と同じ年や。

そやからみんなに大反対された。そやけど俺ら

は、ひつついてしもた。もう離れられん」

溶接の上手な大木さん

別れた子どもに

養育費を送っているという

わたしと同じの49歳だ

今度 新しい奥さんが

女の子を産んだ

あと何年働ける？と尋ねたら

ちよつと考えて

「17年」と答え

溶接焼けした顔をにつこりさせた

■出石アカリいずしあかる(一九四三年兵庫生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会委員。詩集「ハーレクインの耳」(編集工房「ア刊」にて、二〇〇三年度第二十四回フルメール賞文学部門受賞)。

《神戸異人館物語》

夜明けの

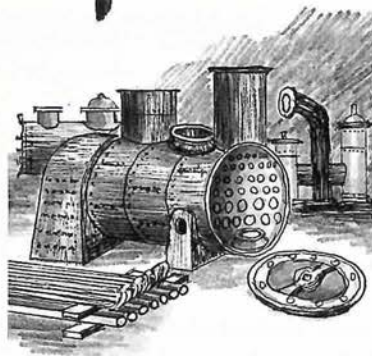
ハンター



ハンター肖像

造船所フオーカード

ハンターが明治十四年四月一日に大阪鉄工所の開所披露式を行った時、数十名の関係者に招待状を出した。人と人との絆を重んじるハンター自身が、誰よりも出席してほしかったのは、キルビーであった。それにはそれだけの理由があった。二十二歳にして日本に上陸した時、横浜で仕事を教えてくれたのはキルビーで、ハンターにとっては上司であった。兵庫開港と共に兵庫に移り、屠牛場兼牛



三条杜夫

絵・谷口和市

肉販売業を始め、二人力を合わせてビジネスの基礎を築いた。キルビーが造船業を開始してからも、もちろん、片腕としてよく働いたが、明治六年にハンターはキルビーのもとを離れ、独立してビジネスを始めた。が、義理固いハンターの気性からキルビーのことを変わらず恩人として尊敬していた。しかし、キルビー自身はハンターに対して複雑な気持ちを抱いていたのである。ハンターが秋月



清十郎を伴ってキルビーの経営する小野浜鉄工所を辞めたことを快く思っていなかった。ハンターは義理人情を重んじる性格であることから、キルビーに遠慮して、兵庫では独立せず、秋月と共に横浜に出て貿易業を開始した。しかし、結局、秋月の病気がもとで、二年も経たずして兵庫に戻ることとなり、明治七年九月に兵庫の居留地でハンター商会を設立した。

一方、ハンターと秋月のいなくなった小野浜鉄工所は活況に乏しくなり、キルビーは共同出資者のハーガンやティラーとの関係もぎくしゃくして、明治八年にキルビーは小野浜鉄工所を閉鎖した。だが、気性の激しい彼はそのまま鳴りをひそめることはせず、今度は独力で造船業を再開する機をうかがい、明治十一年にキルビー商会小野浜造船所を立ち上げたのである。

ちょうどそのころ、同じようにハンターも造船業を起こすべく、大阪で用地を物色していた。明治十二年二月、安治川の河口・松ヶ鼻で大阪鉄工所を創業、二年間で業容が整ったことから、明治十四年四月、正式に大阪鉄工所の披露式を行うことにしたものであった。明治六年にキルビーのもとで働くのをやめたハンターであったが、彼にとつてかけがえのない元上司であることに変わりはなく、尊敬するキルビーに誰よりも出席してほしかったのである。

だが、キルビーは出席しなかった。考えてみれば、小野浜鉄工所にハンターが在籍の時に知り合った佐畑信之がこの大阪鉄工所に出資している。

そういうことを考えただけでも、キルビーがハンターの大阪鉄工所披露式に出席をためらうことは無理もないことなのであった。

兵庫でキルビーの経営する小野浜造船所は新生田川の河口の西に位置する。もともと、生田川の東に位置していたが、明治四年に加納宗七が生田川の流れを付け替えたことから、生田川筋が今では道に変わりはてていた。その道の東に位置し、その東側を新しく掘られた新生田川が流れている。居留地の東端を南北に通る道に沿って西側に雑木林と空地が続いている。その空地で西洋人たちがボールを蹴るなどして西洋のスポーツを楽しむ姿がよく見られた。それまでの日本では想像も出来なかった光景である。周辺の村から日本人見物客が押しかけ、新しく生まれた道端に腰を下ろすなどして、雑木林の中の空地の模様をながめるのが日本人たちの楽しみともなっていた。そのあたり一帯はのちに東遊園地と呼ばれるようになり、ボールを蹴るスポーツはサッカーとして知られるようになる。

そのにぎわいとはうって変わって、新生田川の河口は静かである。ただ、船を造る音のみがあたりに響く。かつての部下のハンターが大阪鉄工所の披露式を行った明治十四年四月一日、キルビーは招待状をもらっていたにもかかわらず、大阪には行かず、自分の造船所でひとりの時間を過ごしていた。工場の建物を出て、波打ち際に出た。大阪湾

が広がっている。春霞みのはるか向こうにハンターの造船所が見えるような気がする。実際は遠いところで、見えるはずもないのだが、心の目にハンターの姿が見えるような気がするのであった。突っ立ってはるか遠くの一点をじっと見据えたまま動かないキルビーに気付いて、ひとりの女性がそっと彼の背後に歩み寄った。キルビーの仕事を助けてくれている日本女性の志津であった。

「ハンターさんの所に行つてあげたら良かったですのに」

その声に振り向いたキルビーがぼつりと言う。

「彼ハ、モハヤ私ノ手ノ中カラ飛ビ立ッテ行ッタ鳥ダヨ」

「飛び立って行つた鳥はもうかわいく思わないのですか？」

志津はキルビーに仕えて二年になるが、仕事の事務的なことだけでなく、身の回りのことも世話をやくようになっていただけあつて、キルビーの心中をよく見抜いていた。

「意地を張らずに、ハンターさんのお祝いに行つてあげれば良かったのですのに」

「……………」

大阪でたくさんの人たちの祝福を受けるハンターとは対照的にキルビーは孤独を噛みしめていた。

「何もかもご自分で切り盛りしなければならぬ今のキルビーさんがおかわいそう」

仕えるうちに、この外国人を愛すべき人物として意識するようになっていた志津の本音である。

「飛ビ立ッタ鳥ノ後ニ代ワリノ鳥ガ飛ンデ来レバ  
イイヨウナモノダガ、ソウモイカナイ……………」

「かといって、今さらハンターさんと手を組むなんてこと出来っこありませんでしようし、ね」

「プレジデントニナツタ彼ガ今サラ私ト手ヲ組マ  
ナイダロウ」

「でも、佐畑さんのように、兵庫制作局の人間でありながら、ハンターさんに手を貸す人もいますからね。要領よく行つた方がこれからの時代は楽だと思えますよ。あたしは女だから詳しくは分かりませんけど」

志津は兵庫の船大工の娘であつた。のちに神戸港と名を変える兵庫港が誕生する以前は、新在家や船大工町のある入り江が賑わっていたものである。参勤交代の大名や朝鮮通信士たちの一行が泊まる宿場町があつた南に入り江を囲んで東西一里四町(4・3 km)、南北十九町(1・9 km)の町が形成され、二百八十軒もの船工場があつた。そこで腕をふるう船大工の娘として志津は生まれた。豪商として名をはせた高田屋嘉平衛が回船問屋を構えた西出町もこのあたりであり、わずか数十年前までは大変な活況を見せていた名残りのある町で志津は大きくなったのであつた。時代が音を立てるような速度で移り変わり、そして町が姿を変えて行くさまを志津は身を以て知っている。近代工業としての船造りの時代に入ったことを実感して志津はキルビーの手伝いを望んで、この小野浜造船所に身を寄せているのである。

志津が言う佐畑は兵庫制作局の佐畑信之のこと

で、彼が局長事務取扱職を務める兵庫制作局は明治六年に湊川の川尻からその東側の岬に移転していた。官営の工場に身を置きながら、ハンターの支援をする佐畑のやり口を当節風と志津は思い、そんな気軽さをキルビーも少しは見習えば良いと女ながらに考えるのであった。

その佐畑が勤務する兵庫制作局の少し西に、この明治十四年、もう一つ造船所が誕生した。鹿児島出身で東京・築地造船所を経営していた川崎正藏が兵庫の東出町に「川崎兵庫造船所」を開設したのである。よりによってわざわざ東京からこの兵庫の地へ造船所を移転させた川崎の噂はすぐに町中に広まった。

「ライバルが増えましたよ」

志津が危機感を持つてキルビーに言った。これで兵庫に三つもの造船所が出来たことになる。大阪鉄工所を合わせると四つの造船所が、西洋カルタのフォーカードの如く揃ったわけである。キルビーの反応は意外に冷ややかであった。

「負けず戦うダケだよ」

ハンターの造船所に対しては格別の思いを抱くが、他のライバルの出現に関しては、むしろ闘志を掻き立てられるキルビーであった。

「ハンターが大阪で頑張るナラ、私ハ兵庫ノ海ヲ支配シヨウ」

まったく気性で、実行力もあるこんなキルビーが志津は好きだった。彼が心置きなく営業活動に奔走出来るよう志津はこまやかに身の回りの世話を焼いた。

そんなある日、京都への出張を終えて戻って来たキルビーが、志津の顔を見るなり、右腕を上げて親指を突き立てて意気揚々に報告した。

「琵琶湖ノ連絡船注文トッテ来タヨ」

「本当ですか？ それは良うございましたねえ」

ツテを頼りに京都まで営業に出かけていたものだが、みごと商談を成立させて帰ってきたところはさすがキルビーである。

「ではこれから忙しくなりますね」

しばらく元気を落としていたキルビーだけに、この受注は何よりも嬉しいことである。

「あなたには仕事の忙しさがいちばんですわ」

お茶を入れながら、ほっとする思いの志津である。洗茶をすすりながら、キルビーが自分に言い聞かせるようにつぶやく。

「明日カラマタ頑張ルヨ」

故国を捨て、人生を賭けて未開の地で大胆なことをやってのける人間の割りにキルビーは単純な男性であった。そんな彼を志津は憎めないかわい異性として思いをつのらせるのであった。

この受注、つまり琵琶湖の鉄道連絡船、第一太湖丸の建造で、キルビーの小野浜造船所はにわかに活気づいた。これまで耳にしたことがないような甲高い音が造船所内に響き渡る。

「すごい音ですねえ。これじゃあ太湖丸じゃなくて太鼓丸ね」

志津が冗談まじりに言う。

「ナニシロ日本デ初メテノ鉄ノ汽船ダカラネ」

キルビーが誇らしげに胸を張る。慶応三年にこ



明治中期の神戸港



の兵庫へハンターと上陸して間もなく、日本で初めて牛肉を食べさせる仕事をした。それまで牛の肉を食べる慣習のなかった日本に牛肉文化を植え付けたのはキルビーとハンターであった。今また、日本初の鉄製汽船の建造を手がけている。このようにキルビーは日本で初めてということを苦もなくやつてのける不思議な人物であった。二、三十人の工場要員を雇い入れていたが、従業員たちに西欧の近代的管理システムを採用したのもキルビーが初めてである。

「ルールヲ決メテ、仕事ヲスル時ハ一生懸命ヤル。休ム時ハキツパリト休ム」

合理的に効率良く作業を進めさせる。併せて技術の教育も実施し、それまでの日本にはなかった近代経営の模範を示すという点でも注目されるキルビーであった。

一方、ハンターの大坂鉄工所では木造汽船・六甲丸を竣工させた後、蒸気船の修繕を行っている最中であつた。キルビーの造船所に比べるとこちらは数倍もでかい。安治川に面した工場敷地は約三千坪。働く従業員の数は二百名近く。これまでの日本では想像もつかなかったような外国製の工作機械を操って従業員たちが興味深く作業を進める。彼らは工場を出ると各々に自分たちが取り組んでいる新しい仕事のことを自慢げに周囲の誰や彼やに語って聞かせる。ハンターの評判は高まる一方であつた。

折りしも、やつて来たのは駐日イギリス大使である。もつとも、大使は開所式に招待されていたが、その後、順調に操業が行われている様子を聞きつけ、ぶらりと立ち寄つたものであつた。愛子が丁重にもてなす。

「お心にかけていただき、嬉しゅうございます。お陰さまで、このようにみんな元氣よく仕事をさせて戴いております」

愛子お得意のレッドティーを差し出す。大使がご機嫌で言葉を返す。

「本国デハタイタイムノ習ワシトイウノガアリマシテ、アフタヌーンノ休憩タイムヲ楽シムノデスヨ。イツカ、ミセス愛子、私タチノ国、イギリスヲ旅シテ下サイ」

「ありがとうございます。いつか本当にそんな日が来るといいですね」

愛子が目を細めてイギリスを想像する。夫が生まれた国、そして、今日日本に色々な文明をもたらしている国。ハンターが工場から事務所に顔を出した。挨拶としての握手を交わすとすぐに

「今、イギリスノ設計図ヲモトニ汽罐ヲ造らせてイルトコロデス」

待つてましたとばかりに大使に報告する。

「ホホウ、汽罐、自社制作出来ルヨウニナリマシタカ。ソレハ立派デス。ハンターサン、器用デスカラ」

「イヤ、私ヨリ秋月ノ技術監督ノ賜物デス」

本心から部下を信頼するハンターと秋月の情熱が多数の従業員を動かして、自社で汽罐を製作するまでになっていた。

「イギリスノ叡智ヲ結集シテ日本デ汽罐ヲ作ルコトハコレカラノ日本ヲ発展ニ導ク素晴ラシイコトデス。私タチイギリス人ノ評判ガ良クナッテ嬉シイコトデス。ハンターサン、期待シテマスヨ」

「本国ニヨロシク報告シテ下サイ」

大使は確かにイギリス本国に張り切って報告した。その記録によれば、明治十四年の末までに大阪鉄工所では合計三十三隻の蒸気船の修繕を行い、うち三隻に自社製作の汽罐が装備されたとある。さらに新しく蒸気船機関が二個予定され、その後、

総トン数四百五十トンの船とほか一隻が建造準備中であることも大使は記載報告した。

「創業当初ニシテミレバ、ナカナカ順調ニビジネスガ進展シテイマスネ」

年末に再び顔を見せた大使が讃辞を送った。兵庫のキルビーが新造を主に手がけているのに対し、大阪のハンターは修繕を主とするなど、期せずしてジャンルの区別がなされ、せめぎ合う必要のないことが救いであつた。キルビーが頑張っていることを風の便りに聴いてハンターは喜んだ。

「愛子、キルビーサンハ私ヨリサスガ商売上手デス。日本デ初メテノ鉄ノ汽船ヲ造ッテイルノダカラネ。私ハ今ノトコロ修繕中心デ儲ケガ少ナイデスヨ」

タイタイムに夫婦の会話でハンターが本音を言う。

「それは良かったですねえ、キルビーさんはあなたの恩人ですもの。私たちにだつて真面目にやってくれば、きっとそのうちに割りの良い仕事ができますよ」

ハンターと愛子が健闘を讃えるキルビーが思いがけなくも、大変な境遇に追いやられる羽目になるうとは誰しも想像だに出来ないことであつた。

つづく



■三条杜夫(さんじょう もりお)  
フリーアナウンサー、放送作家、ルポライターを経て、放送業界へ。経歴にもとく地域活性化に貢献しての活動も評価されている。著書「いのちの結んで」「あの道七福神めぐり」「そうゆう人だ」となど。









スラジル日本移民100周年を祝う

## 第28回神戸まつりに KOBECOサンバチーム出場

2008年の神戸まつりは五月晴れ!

おまつりは、お天気だったら大成功。今年はすごい人出、85万人!信じられなーい!KOBECOサンバチームは総勢100人でフラワーロードへ。チームリーダーの小泉美喜子はブルーの衣装にブルーの傘、ブルーの羽根で、年を忘れてパワフル・サンバ。ダンスリーダーの渡メグリはブラックの衣装軍団で大迫力。子どもたちはブルーの衣装や、イエロー、パープルとカラフルに。チビチビたちも元気元気!真っ赤な衣装のチームは、加古川から毎年参加している石原奈津子バレエ団のかわいいバレリーナたち。メイクアップも美しく、踊りも抜群!美しく楽しい。今年のフロート車には、UCC上島珈琲(株)、(株)フットテクノ、さんちか、服部メガネ店、(株)エフェルエスにご協賛いただき、制作はブロックス(株)。ブラジル日本移民100周年を祝った、ひととき華やかな花のデザインが人気でした。

★2008年パレード部門・オーディエンス賞を3年連続で受賞しました。







『KOBE子ども環境メッセージ』  
を発信する子どもたち



高木洋子実行委員長



大森繁夫実行委員長代理

## 世界の子どもたちが一緒に環境問題を考えた「子ども環境サミットin KOBE」

5月21～24日、神戸で「子ども環境サミットin KOBE」が開かれた。このサミットは、公募によって世界から集まった子どもたちが、環境について話し合い、未来へ向けたメッセージを発信するもの。今回は、世界21ヵ国・地域の子どもたちが集い、3日間にわたって意見交換や、交流を行なった。

24日に神戸芸術センターで行なわれた閉会式で、実行委員会・高木洋子委員長は「皆さんは、世界を変えるユース(youth)のかたまり。この後発表されるメッセージは、21ヵ国の希望が込められています」とあいさつ。参加者の中から、菊池貴之くん、アレクサンドラ・ローズマリー・バクスターさんらによって発表された「KOBE子ども環境メッセージ-Message to the G8!」は下記の通り。

(前略) 今、私たち、僕たちにできることは

- ・ゴミなどの問題には7R(削減:リデュース、再使用、リユース、再利用:リサイクル、研究:リサーチ、廃棄:レフューズ、再生:リジェネレート、見直し:リシンク)。

- ・エコシステムの回復(木を植えたり、川をきれいにする)。

- ・ようするに、地球を愛することを忘れないことが大切だと思います。

でも、子ども達だけでは地球を救うことはできません。

お金だけでなく、食料や衣料、マンパワーを提供するシステムを大人たちでつくってください。

皆さんにお願いです。私たちは地球環境を守るためにあなた方の助けが必要です。

環境にやさしく持続可能な発展を導入することで地球のエコシステムのバランスを取り戻すことをお手伝いしてください。

学校で環境問題について教え、実行に移すような国際的な法律を施行して、安全な環境づくりをすすめてください。

以上のメッセージは、子どもたちから鴨下一郎環境相はじめ、G8環境大臣会合の各国代表に伝えられた。





魂に響くHalkoさんの歌声



各国の珍しい楽器を演奏する  
PIKALEさんとともに



かわいいフラダンサーたちも登場



各地で行われる写真展のため  
来日したNick加藤さん

## ソウルフルな歌声に込めた自然と平和への思い… 桑名晴子ライブ Nick加藤写真展

去る5月16日、カフェド・佛蘭西で、Nick加藤写真展とTAL K&LIVEが開催された。この催しは、身近な問題としてさまざまな社会問題、環境問題を考えるピースフレンドシップコミュニティなる17名のグループ。その中心メンバーが、ライブをおこなった歌手の桑名晴子さんだ。

桑名晴子さんは70年代より、ロックを通じ音楽活動を開始し、76年にメジャーデビュー。ソウルフルなヴォーカルで幅広いジャンルで活躍。コカコーラのCMソングで彼女の声を耳にした人も多いはず。桑名正博さんは兄にあたる。86年にメジャーを退いてギター一本の歌旅人となる。自らの足で歩いて感じたことを通じ、さまざまな問題をともに考え、音楽とともに伝えようとうと現在のよう活動へ。

「例えばブルトニウム処理施設の問題。遠い青森の六ヶ所村で稼働に向け動いていますが、電力を使っているのは私たちなのです。ただ情報に惑わされて反対するだけでなく、身近な問題としてとらえ、行動していくことが大切なのです」と桑名さん。

今回はハワイ島在住の写真家Nick加藤さんの、美しい南国の景色とそこでおだやかに暮らす人たちの魂を伝える鮮やかな写真とともに、「日本人が忘れ去った、自然に従う美しい生活がある」ハワイの音楽を通じて、人間の本来あるべき姿を黙示するライブとなった。

ピースフレンドシップコミュニティ  
<http://peace-one-earth.com/>

## 「魂に届く舞をめざして」 大和松蒔 兵庫県文化賞受賞、写真集を出版

地唄舞の大和松蒔師が、昨年11月に歴史と伝統を誇る兵庫県文化賞を受賞。

そしてこのたび、松蒔師の数々の舞の、美しい写真をまとめた「大和松蒔 あざやかなる雪花」が出版され、5月30日、生田神社会館で、受賞と写真集出版をお祝いする会が開かれ、約150人が集った。

今は亡きアシックスの鬼塚喜八郎会長より「大和松蒔を囲む会」の会長をバトンタッチされた貝原俊民前知事が、代表発起人のあいさつ。

松蒔さんの格調高い一中節「松襲」の舞の後、斎藤富雄兵庫県副知事、北口寛人明石市長、芸術評論家・廓正子さん、村尚也さんらのメッセージが続いた。作家・村松友視さんは「刻一刻の努力というものの積み重ねが、あらゆる色合いを突き抜けて伝わってくる爽やかさが松蒔さんの魅力」と祝辞を。そして、林五和夫さんからもメッセージ。乾杯は生田神社・加藤隆久宮司が音頭をとり、祝宴が始まった。

祝言「高砂」を、久保信一郎さんと笠田昭雄さんの謡、久田舜一郎さんの小鼓で、めでたく披露され、会場は一層盛り上がり、閉会となった。



写真集「大和松蒔・あざやかなる雪花」より



村松友視さんがお祝いの言葉を



お祝いに集まった方々



松蒔師のお弟子さんらも集った



祝言「高砂」



## 神戸の真珠業界6人衆がそろって還暦 「Young 60s of Pearl City Kobe」 パーティ開催

5月31日、神戸外国倶楽部で、今年還暦を迎えた神戸の真珠業界6人衆のパーティーがにぎやかに開催された。

「黒拍子」の和太鼓による勇壮なオープニングやシンフォニーナガノ特製の「還暦ケーキ」、「プラス・ポルテーニョ」のファンファーレに続く乾杯など、会場内はスタートからヒートアップ、ベリーダンスに続いてパールベンチャーズが登場すると、会場全体がリズムに乗って踊り出す大盛況。

上田和男、大月京一、加藤良治、清水勝央、近澤 真、山本光央の面々は、全員、1981年、パールシティ神戸スタート時点からの同期で、いまや、日本真珠振興会、日本真珠輸出組合、日本真珠加工輸出組合などをリードする真珠業界の中心人物達。

「Young 60s of Pearl City Kobe」を自認する6人がお祝いに集まった120名を前に若さあふれるパフォーマンスを披露、大いに会場は盛り上がりを見せた。



パールシティ神戸を盛り上げてきた6人の皆さん



ジャズ演奏のステージ



お祝いに集まったたくさんの方々



「還暦ケーキ」でお祝い



## 神戸ビーフしか扱わない「西神飯店」の姉妹店「神源」が三宮にオープン

世界に冠たる美味として知られる神戸ビーフ。年間約2000頭しか市場で認定されないことから、なかなか口にすることができない。この“幻の味”を良心的な価格で提供しているのが神戸市西区にある「西神飯店」。神戸ビーフの中でも神戸牛品評会で認定される最優秀賞・優秀賞・上位入選に選ばれた高品質の神戸ビーフのみを一頭買いしているというからすごい。わざわざ東京からタクシーに乗って「西神飯店」やって来て、神戸ビーフを食べた後、さらに東京にタクシーで帰るというお客さんもいるほど。その名は全国中に知れ渡っている。

この「西神飯店」は、これほどの神戸ビーフを扱うがゆえに、「三宮に出店を」というファンからの長年の熱望があった。その要望に応える形で、6月10日、三宮店「神源」がオープンした。メニューに並ぶお肉の数々も、西神飯店で出されているものとほぼ同じもので、もちろん100パーセント神戸ビーフ。

メニューは、神戸牛品評会での受賞牛1頭から5枚しか取れないというプレミアム特撰ヘレスステーキ(3,800円)、プレミアム特撰サーロインステーキ(3,600円)、プレミアム特撰リブロースステーキ(3,500円)を筆頭に、上ロース(1,380円)、上カルビ(1,380円)など豊富にそろう。もちろんコースで味わうことも。一頭買いだから取れるふくらはぎの部分「千本」(1,500円)、バラ肉の脂の上に付いている赤身部分「かつば」(1,500

円)という珍しいメニューも。



JR三ノ宮駅すぐ東の高架にオープンした



桂木正昭マネージャー



6人掛けのテーブル席



お座敷でゆったりといただくこともできる



世界に冠たる美味「神戸ビーフ」をお試しあれ!



■神戸牛 神源 神戸三宮店  
☎078-230-2918  
神戸市中央区琴ノ緒町4-1-280  
不定休／不定休  
営業時間／17:00～24:00(L.O.23:00)  
日・祝日 17:00～23:00(L.O.22:00)  
席数／74席

## ■ 六甲味散歩 — 「わたしの好きな店」

### 串揚げ専門店「串の助」

鈴木正幸(神戸大学名誉教授・近大姫路大学教授)

#### 美的感覚が込められた串揚げ

阪急「六甲」駅山側、徒歩3～4分。いつも通る道だから、店の存在は知っていたが、入る気はしなかった。串カツとかトンカツは若者向き。高齢者に縁がないと思っていた。しかし家内の友人(だから高齢者)が大のお気に入りだという。ならば一度試してみようと思った。

最初にでたのが、ゴルフボール大の串刺し。中身はわからない。食べて驚いた。カボチャの味のエッセンスが口内に漂う。高級フランス料理のスープの最初の一口を口に入れたときと同じだ。調理の細やかなコロモに包まれたハモに梅肉。コロモはカリリとして固くない。重くない。稚アユのほろりとした苦みも何ともいえない。最初の3つで完全脱帽。先入観を恥じ入る次第。次のゴルフボールは何と蒸し穴子。感動。見た目の美しさ、一品一品の素材の良さが鮮明に読み取れる。

その日の仕込みで最高の味を提供したいそうで、マスターにすべておまかせのコース仕立てがうれしい。揚げ油はラード100%。コロモにも企業ヒミツがあるようだ。

高齢者の常連さんが多いのもうなずける。家族づれも多いという。「器は料理の着物」とは魯山人のことば。串カツそのものに美的感性を折り込んだマスターの創意工夫に感嘆。

前山一夫・郁子夫妻が2人で切り盛り。前山マスターは芦屋の「串の助」で修行、のれん分けを許され、その後三宮北野坂で約20年。移転先は阪急沿線を歩き回って、この地がいちばん気に入り、開店2年半。味覚文化の将来を切りひらいてくれている。夜の献立は串の助コース3,500円～、お昼は1,300円～とリーズナブル(串の内容はすべておまかせ)。ぜひ一度。



ご主人・前山一夫さん、郁子夫人と筆者



これが揚げる前、どれも新鮮な具材



カリリと揚がった串揚げ



自家製ソース、  
塩をつけていただく



#### ■ 串の助

神戸市灘区宮山町6-12

ラムールビル2階

☎078-843-3370

11:30～14:00

17:00～22:00(L.O.21:00)

月曜休